

銀の滴降る降るまわりに（2）

知里幸恵さんが金田一博士と出会ったのは、15歳の時です。

金田一博士は、日本聖公会の宣教師でアイヌの救済伝道活動をしていたバチエラー博士の紹介を受け、旭川に金城マツを訪ねるのですが、そこで天才少女を発見する事になるのです。

知里幸恵さんは、当時、自分がアイヌである事に劣等感を持っていたように思います。彼女は、初めて会った金田一博士に「アイヌのユーカラは、ほんとうに価値があるものなのか」尋ねます。

これに対して金田一博士は、

ユーカラは祖先の戦記物語であり、詩の形に謡い伝えている、叙事詩という口伝えの文学である事。

人間が文字を持つまでは、かつてはヨーロッパでも、あの「イリアード」「オデッセイア」は、その最後の伝承者のホメロスの時に文字が入って、はじめて書かれたものである事。

叙事詩というのは、民族の歴史でもあると同時に文学でもあり、今の世にそれをそのまま生きて伝えている例は、世界にユーカラしかない。だから、今我々がこれを書きつけないと後で見る事も、知ることも出来ない事。等を真剣に答えます（藤本英夫著「銀のしづく降る降る」から）。

これを聞いた知里幸恵さんは、祖先が残してくれたユーカラの研究に全生涯をかける事を決心したのでした。

それはまた、彼女が、独自の言語や歴史を持つアイヌ民族やアイヌ文化に自信と誇りを持った瞬間でもあったと思います。

その後彼女は、重度の心臓病と闘いながら、ユーカラの記録と日本語への翻訳に没頭し、「アイヌ神謡集」を完成させます。

しかし、残念な事に、知里幸恵さんが死の直前まで校正しつづけた「アイヌ神謡集」が出版され世に出たのは、彼女が亡くなった1年後の1923年8月の事でした。

「アイヌ神謡集」の序において、彼女はこういっています。

「其の昔此の広い北海道は、私たちの祖先の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、何と云う幸福な人たちであったでしょう。

(中略)

時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗残の醜をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出て来たら、進みゆく世と歩みをならべる日も、やがては来ましょう。それは本当に私たちの切なる望みでございます。(以下略)」

知里幸恵さんの「アイヌ神謡集」は、多くのアイヌの人たちに、アイヌであることの自信と誇りを与えただけではなく、英語やロシア語、エスペラント語に訳され、世界に紹介され愛読されています。

知里幸恵さんは、今頃はどのようにしていることでしょうか。弟の真志保さんと一緒に、登別の海を見ているのでしょうか。(塾頭：吉田 洋一)